

小曲吟さまれ申候。中禪寺湖の音楽はイ調ホ調の長音階にて候。快き協和音のコーラスにて候。それ以上何物をも見出しがたき平面美に候。皮相美に候。

御約束の白樺の皮しのばせしナイフもて試み候も思はしからず近所の茶屋にて人のよささうな姫さんより貰ひおき候。然し歌の方はあやしきものにて候。この皮をたきつけにいたし候よし氣がりの一つにて候。

むら／＼と立つた樺の細い幹か白絹のやうな柔い光澤をおびてそこらに落ち散つた葉は斑に金色に光る。

君が十八番を思ひ出さする白樺の林もこれあり候。

落ちて来る一葉のつぎにまたおちむ黄なる一葉のまたるゝ夕

この作者の心もちてみるひまもなく通りすぎしはいまものこりをしく候。

明日は日光に参り徳川三百年の歴史が私に遺しおきたる唯一の作品をみて歸京の途にのほり申

すべくこの宿も今夜限りにて候。よべきし湖の悲しき寂しき鳥のこゑ忘れず候。おみせしたきは西の戦場原
共にきゝたまは今宵のそのとりの歌。

露

文科一部二年 山中 たか

露こそは自然の母君の此の世にありとあるものをはぐくみ給ふ愛の御涙ならぬ。なさけあつき母君はひねもす己が務をよくこそはげみたれど野にも山にも草にも木にも甘き汁をいどさはおかせ給ひて其のいたつきを慰め給ふ。されば秋の夜を夜もすがらなく虫も其の御恵みによりて聲からず事なく春の日をひねもす舞ふ胡蝶も其の御なさけによりて疲るる事なく己がじじ其の務をつとめいそしむにぞありける。さては塵の世に立ち騒ぎて苦しき生をいとなむものにもまた同じう御恵みをかけさせ給ひて疲を癒し悶を慰め給ふぞありがたき。月あかき夜野邊にさまよへば千草八千草の其の恵みに潤ひ

宿りて美しう輝けるは美人の臉うるほひしに似て何をうらみ何をかこちてといとあはれにもまたいちらし。

かく數へあぐればさても盡きせぬ御恵みの深さよ。いとも尊くなつかしき自然の母君はかく春の朝も秋の夕もさては晝となく夜となく此の世にありとあるものをはぐくみ給ひてひねもすの務に疲れし身を慰め夜もすがらの悶に苦しめる心を救ひ給はんとて涙の露をおとさせ給ふにぞありける。かく自然の母君にはあつき涙を持たせ給ふを此の世の人にして若しいささかも涙なかりせば心なき岩木にことならざるべし。かくてはさらぬだにうき事多き此の世いかにわびしくつらからまし。あはれ自然の御母の此の美しの御涙我等もなぞらへて持たまほしきものにこそ。

郊遊會

文科一年 平田 いち

秋閑なる十月四日群馬縣太田に郊遊會を催され

て白妙の玉をかざし吹く風にはほろほろとこぼれてあな面白しとの感起さしめ或は御空に輝ける星の影さへ宿して此處も高き雲の上かと疑はしめ或は靜かに虫の聲をふむもすぬれしむるは天の浮橋渡る心地して我が世の限りを此處にと思はしむるもかたじけなし。みづみづしき緑の木の色もゆるばかりに輝く眞紅の紅葉其の恵みに潤ひて天つ日に照りそひたるいづれめでたからぬかは。かげろふもゆる山路に咲き匂ふ葎の色を深からしめ枝もたわわに茂れる糸萩に香を合ませて置きあまるが分け行く袖にもすそにはらはらと散りかかるは我れをしたふ妹の涙にも似てなつかし言はん方なし。赤き花うばらの小さき花びらに包まれたる芥子撫子などの上におかれたるなごいとし少女子の林檎の色したる頬をつたふあつき涙の玉かあらぬかといと愛らしうて見る人にあはれをもよほさしむ。さては池の面の白蓮の青き廣葉におかれたるは尊き聖人の罪深き人の子の上を救はせ給ふとてそそぎ給ふ御涙のやうにてまことに尊し。芙蓉花に

ぬ。かねて待ちし甲斐ありて、氣づかひし風雨も起き出づる頃には全く晴れたり。午前五時といふに校門を出でて、三々五々打ち連れ浅草停車場へ急ぎぬ。星影漸く消えて、空には曉の色漂ひそめぬ。朝の街は未ださめず電車の響も聞えず、只近郷より來たるらしき野菜積みたる車の、細長き提灯つけて、コトコトと薄明の道を牽き行く。行くほどに人の顔も漸く白くなり、東の空は明るくなり、雲の色は赤に黄に燈にうつり行くまゝに、電燈はうすれ、兩戸線る音あちこちに聞ゆ。兩國橋にいたれば行く手の空に赤くまるき朝日上りて、隅田川の川舟には朝餉の煙たち、朝風は川の面迂りて吹き來るもいと心地よし。七時何分發といふ汽車は四百餘人を乗せて動き出でぬ。車窓にうつり行く紺碧の空、深緑の並木、流るる水に秋の色あり空吹く風、森に啼く鳥、波打つ千町田に秋の聲あり。農家の庭先に柿いろづき、コスモス咲けるなどいとのどげし。「富士よ」「富士よ」といふ聲に、左の方見れば、晴れたる空の一角に遠

く氣高く聳ゆるなど、武藏野の秋はいと趣深し。三時間にて目的地につくべかりしに、汽車の進みおそく二時間ほどの延着にて、眞晝頃に太田町に着しぬ。太田町は舊日光例幣使街道の一驛なりしなり。うららかなる小春日に照らされて、昔めきしその町をすぎ大光院にむかひぬ。昔々語る老松の立ちならぶ道の傍には、子育吞龍などに書きたる赤き幟、さては栗、松茸など鬻ぐ店ならべり抑、大光院は徳川氏の、その祖新田義重を祀るところにて、その開祖吞龍上人は慈徳よく衆を率ゐし故に、人々の尊信厚く今に到るまで太田の吞龍とて遠近に聞えし名刹なり。大光院にて割籠したゝめ、菓子など開きてしばしいこひぬ。

それより新田氏の舊城趾なる金山に登らんと其處を出で野道を辿りて行きぬ。小川の邊にはやさしき野菊蓼の花など咲きて虫の音あはれなり。行くてに短かき石橋ありて麓橋といふ。そこよりはやゝ道嶮しく、我おくれじと心ははやれ

ごも足の進は漸くたどたどしく、行くほど道はきはまり、熊笹いばら茂れる間道をわけ、小石ちりほへる坂を登れば、呼吸苦しく汗は脊を濕しぬ。十歩行きてはやすみ、立ちどまりては五歩進む、暫くにして白き石の鳥居は頭上に見えぬ。これに勇氣を倍し一氣にて頂にいたりぬ。松樹鬱蒼たる蔭に新田神社を拜して裏の方にまはりぬ。實に壯大なる眺めなる哉。遠く筑波男體は雲をつき、赤城榛名は長く裾をひけり。遠邑近郊雙眸に集り、平野を流るる渡良瀬川は帯の如く白し。しばしが程は高壯の氣にうたれて言ふべき言の葉なく、只胸襟廣うなるをおぼえぬ

あるはベンチによりこいこひ、あるは木の間に歌ひ、スケッチに筆を走らせ、今求めし繪はがき認むるなど先の苦しみはいづこにかうせて興はどりどりに盡さず。かくて元來し道を辿りて町に下り、名物松茸羊羹に袋ふくらませて風冷やかになりをむる頃汽車に乗りぬ。汽車はいと早く馳せて、忽にして利根川の鐵橋にさしかかりぬ。落かかりし夕陽は滔々たる流にうつりて美はしく、間もなく汽車は東京につきぬ。三日あまりの月はもはや西に傾きて、暗き空に電燈の輝き華やかなりき。

生命は共通である。生存は相殺である。自然は偏倚を容さぬ。愛憎は我等が宇宙に纏る二本の手である。好悪は人生を歩む左右の脚である。好きなものが毒になり、嫌ひなものが薬になる。好きなものを食うて嫌ひなものに食はれる。宇宙の生命は斯くして有たるものである。好きなものを好くは本能である。嫌ひなものを好くに我儕の理想がある。

徳富 蘆花